

TUTTIと私

高橋 良子 Vla TUTTI 編集長

50周年記念CDにTUTTI全号を収載して下さるとのこと、とても嬉しく、光栄に思いますが、そんな風に扱って頂く価値があるのか、多少心配な気もします。100回定期演奏会の前に配布したTUTTIは44号で、この13年間に通常の号44号と第1回萩演奏旅行と日比谷名誉団長追悼の2回号外を発行しました。



高橋さん ご自身提供

私は最初から関わってきました。事の始まりは1998年暮れごろ、休団から復帰された畠中さんが団内誌を復活させようと考えられて、編集部員を募集されたことでした。清水さんと鈴木美緒さんは畠中さんがお願いして内定していたようですが、私は自分からやらせて下さいとお願いしてメンバーになりました。言ってみれば予定外のメンバーだった私がずっと関わってここまで続けるとは私自身はもちろん誰も想像していなかったと思います。

今もTUTTIの表紙にリニューアル〇号と書いてあります。元のTUTTIがあったのでしょうが、私は全く知りません。私が1998年初めに入団したとき新人紹介などに載せて頂いた覚えはないのでおそらく何年かのブランクがあったのでしょう。

今は主催演奏会（定期演奏会とファミリーコンサート）の少し前を発行時期にしています年3回になっていますが、当初は年4回のペースでした。2号で森口先生に登場して頂いたのを皮切りにできるだけ指揮者のメッセージを載せさせて頂くようにしたのですが、当時サマーコンサートで指揮して頂く先生にもお願いし、また多くは練習開始前の掲載だったので、あらかじめ郵便や電話でご

相談して出演されるよそのオケの演奏会の楽屋をお訪ねしたり、ご自宅近くに押し掛けたりとずいぶん図々しいことをしたものです。

ほとんどの先生は文章は苦手などと最初おっしゃってもたいていは書いて下さいます。ただ森口先生には最初の方に二度とこんなことは頼まないようにと釘を刺され、2回目はありませんでした。三原先生は一晩で何回も書き直しをされ、朝メールを見ると5通入っていてこれが最後です、などと書かれていたりします。横島先生はインタビューならいくらでもとおっしゃってお話しして下さった内容をまとめさせて頂いています。指揮者シリーズは文章、内容にお人柄が表れ、意外と生の声をうかがう機会がないだけに皆さんからもお書き頂いた先生からも好評でよかったですと思っています。

編集部員にも異動があり、清水さんがやめられ、山田（現瀬島）さんが入られてやめられ、畠中さんが転勤でやめられ、鈴木美緒さんがやめられ、本山さん、桑野さんが加わられました。1号の冒頭の記事は「中期計画決定！」です。畠中さんが団内誌の復活に期待された機能もおそらくそういう問題意識を共有できる媒体としてのものであったのではないかと思います。畠中さんがやめられて私が編集長をさせて頂くようになりましたが、それに関しては残念ながら私にはその力量はないと言わざるを得ません。畠中さんがやめられて以降だんだんに内容が団員間の親睦に役立つだけの方向に変わっていきました。

今で定番のシリーズ、鎌響のある生活、仕事人、室内楽、演奏会で活躍する奏者、鎌響への手紙、に次々にいろいろな方に書いて頂いているだけのようになっていました。それでも長く続いてきているので、以前ほど原稿をお願いして固辞される方も減り、それぞれの方の思いがけない一面を知ることができ、おかげさまでそれなりに楽しい読み物にはなっていると思います。

100回記念のアンケート記事はいかがだったでしょうか。私としてはほとんどの方にもれなく回答頂いたし、コメントも多く集まって、最初に意図した以上に面白いものになったと思いました。

実はその44号を最後に私はやめようと思っていました。理由は長くやり過ぎた、他の方がやったらもっといいものができるかもしれない、時間がそれほどとられるというわけではなくても精神的に続けることは重荷だ、などです。本来やめるならきちんと後継者を探してバトンタッチすべきですが、別にTUTTIがないと困るわけでもないのかまわらないかと思いました。

でも演奏会前後に多くの方とお話ししてやはりきちんと次の編集長に引き継ぐべきだと思えるようになりました。どなたかどうか手を挙げて下さい。



インスタントコンダクターの左は高橋さん、その左は小原さん Vn そして団員たち。そして下はVla一同（いずれも KSO アーカイブ）



楽器運搬のこと

今城信彦 Perc 役員

どこのアマオケでも同じ悩みを抱えているのかもしれませんが、楽器の運搬は大変なことのようです。



団車での運搬 左から天辰さん Cell、太田さん Perc、蓑田さん Perc
(KSO アーカイブ)

30年くらい前に、最初に鎌響に入団した当初は、分館（もしかしたら若いメンバーは知らないかもしれませんが、一の鳥居の前に700人程度収容できるホールがありました。）に楽器置き場を借りることができていたので、かなり楽な状況だったのです。ところが分館が老朽化で解体ということになってからが大変でした。田中さんのお宅に楽器を置かせて貰った時期もありました。でも今のように団車がない時代だったので、例えば御成小学校で練習してから、田中さんのお宅までPaukenを御神輿のように運んでいたこともありました。スーパーの前を、楽器を担いで行くのですから、なかなかのインパクトがあったのではないかと思います。でも太鼓屋に取っては楽器を運ぶことが基本とっていましたので、あまり大変とは思わなかったのですが、この年になると、楽器の

重さが応えるようになってきているのが心配なところですが。

芸術館時代になると団車を用意して貰ったので、どこで練習があったとしても大丈夫にはなったのですが、屋外の駐車場に置いてある時代は、夏は Pauken のヘッドが緩んでいたたり、冬は逆に張りきっていたり、楽器に取っては酷な状況なのだと思います。それに芸術館以外の場所では、楽器がエレベーターに入らないということで、まだ御神輿をしています。さすがに室内になりましたが。

次の 50 年に向けてということでは、やはり固定した練習場と、楽器・譜面を入れられる倉庫が欲しいですね。長年の夢になるので、難しいことは十分に知っているつもりですが、やはり夢として、自分達の練習場が欲しいですね。学生時代から読響や、N響の練習場に行っていたので、あの環境は夢みたいですね。読響の方が、練習場としてはインパクトがあったのですが、専用の建物が読売ランドの奥にあります。天井もホールの様に高く響きを感じられる練習場でした。そこまでの贅沢は言いませんが、次の 50 年の中で、練習場が持てると良いですね。



右から今城さん Perc、戸塚混声合唱団事務局長の鈴木栄一さん、矢野さん CB、塚田さん Hrn、その後ろに河原さん Vn

高級葉巻と録音

矢野健 CB

鎌響の20年位前のことを思い出してみると、平均年齢が毎年1歳ずつ上がっているのではないかと思われる時期があった。要するにメンバーが固定していて、同じ顔ぶれが毎年年を取るからそうなる訳である。しかし、最近の状況を見ると若い人が多くなってきた。一方、古くからのメンバーもいて何となく全体で良いバランスを保っている様に思える。ここで思い起こすことがある。それは高級葉巻タバコのことである。何でも最高級の葉巻タバコは古い葉と新しい葉をブレンドするそうである。古い葉だけでは力が無い、しかし、新しい葉だけではコクが無い。古い葉と新しい葉をブレンドすることで力とコクの両方を備えた高級葉巻タバコができるそうだ。その意味で言うと私などは正しくコクの最たるものである。冷静に考えると例えば出が一寸遅れるとか反応が鈍いとか余り好ましくないこともあるのではないかと思うが、しかし、それも音楽の一つの要素ではないかと一人慰めている。「鎌響の様に年代の広がり広いオケの音はどこか味わいがある」と言ってくれる人はいないかなー・・・。

もう一つ、私は15年位前から練習の録音を録る様になった。録音する様になった一つの理由は録音機器の進歩である。それ以前にもアナログのカセットレコーダで録音したことがあったが、バッテリーの電圧によって回転速度が変わってしまうので、録音した音を再生して楽器と合わせようとしてもピッチが合わないのが不快でやっていられなかった。当時、ホルンに現在函館在住の佐藤仁樹氏がいて、彼はDAT（デジタルオーディオテープ）で練習の録音をしていた。そのDAT録音を1週間だけ借りたことがあったが、その素晴らしさは本当に目を見張るものがあった。しかし、佐藤氏の持っていたDAT装置はかなり大掛かりで、単1サイズのバッテリーを10個近くも使っていた様に記憶している。もう少し手軽にこれに近い機能の録音はできないかと探したところ、それから数年してMDが何とかこれに匹敵する性能を持つことが分かった。今ならデジタル録音の機器はいくらでもある。

録音する気を起こしたのは、もともと私は余り反応の早い方ではない。指揮者の棒に合わせて、瞬時的にそれに付いて行く等はとても自分には無理である。そこでこれを録音で聞いて補おうと考えた訳である。それにも増して大事なことは休みの間の数え方の勉強である。録音をスピーカから流して、パート譜を見ながら休みの後の出が必ず出られるかどうかをチェックする。通常の練習であれば指揮者先生がおられるので、棒を見て拍子を数えれば良いが、棒が無いところで拍子を数えることはやってみると結構難しい。それでスコアと首っ引

きで、3小節前にVnが出て、1小節前にC1が出て等を楽譜に書き込む。その場合に、自分の居る場所で録音しているので、全パートの中で自分の場所から聞こえ易いパートも分かるということがある。練習ではこの書き込みに指揮者先生の棒も加わるので、殆ど完璧で出を間違えることは先ず無くなる。

録音を聞いて分かることはそれだけではない。例えば休みの後の出が皆自信を持って出ているか否かは出始めの音に力があるかどうかで録音を聞いてみると何となく分かる。特に曲がトリッキーに出来ている場合に、出が難しいところをちゃんと出してくれないと聞いていて何となく物足りない。これは多分聴衆の立場でも同じではないかと思う。トリッキーなところをちゃんと聞かせて“アレ今の所何？”と思ってもらわないと聞く方は面白くないのではないかと思う。その様なことで出が難しいところであればあるだけ皆でバリッと出る必要があり、私の場合にはその基は録音にある。

練習で指揮者先生に捕まって、何回もやり直しをさせられているのを見ることもある。その様な場合に、先生の言われることをその場で直ぐに受け止めるのはかなり難しいのではないかと思う。その様な場面を見るにつけてもあの人録音しておけば良いのにといつも思う。鎌響のレベルアップのため録音人口が増えることを願っている。

2013年1月3日



左から遠景に大内さん CB、東さん C1、前に矢野さん CB、小原さん Vn



コントラバスの仲間たち 左から福島さん、原さん、渡辺さん、矢野さん



岩井海岸合宿 (KSO アーカイブ)

次は矢野さんを紹介する朝日新聞全国版 昭和 55 (1980) 年
前でチェロを弾くのは松野義明さん Cell (宇多さん Vn 所蔵)

夏だより

サラリーマン80

▶▶6

この二日、横須賀市湘南鷹取の団地まつりに招かれた「鎌倉交響楽団」のコンサートは、会場の鷹取小体育館に約五百人が詰めかけ大盛況だった。

●夏まつりに新風呼ぶ

鎌倉交響楽団は鎌倉市と周辺に住む音楽愛好者でつくるアマチュアオーケストラ。メンバーはサラリーマンを中心に、主婦、OL、学生、と多彩で、年齢も高校生から七十歳を過ぎた高齢者まで幅広い。年二回の定期演奏会と小学校などに頼まれての音楽教室的な活動が主で、団地の「夏まつりコンサート」は今年が初めて。夏まつりといえは、盆踊りに民謡、金魚すくいなどが通り相場。クラシックは場違いにならないか、との不安もあったが、「生のオーケストラなんて久しぶり」と喜び主婦らの声に、心配は吹き飛

市民交響楽団

さん(四)は、「やって、よかつた」と思った。矢野さんが鎌響に入ったのは四十九年の夏。いまは、コントラバスのパートリーダー。仕事に疲労困はしいして、「音

社会人中心に軌道 仕事に余裕 潤い求めて



夏まつりコンサートで演奏する矢野さん —横須賀市の鷹取小体育館で

一を務め、「仕事 楽どころでなくなった毎日。以外では鎌響が一番大きな存在」という熱の入れようだ。日本電気伝送通信事業部デバイス部の専任技師で、早稲田大学のオーケストラに入団して以来の「アンサンブルのとりこ」。三十七年に就職してから、東京都内の社会人グループに所属していたが、こんな矢野さんにも、音楽とは無縁の仕事に明け暮れる時期があった。

30-40代の実力派進出
こんな時期が、七年ほど続いた。

た。この間、矢野さんらの開発した技術は、世界のトップレベルに。第一次石油ショックがよらやくおさまりかけた四十九年、矢野さん一家は、鎌倉に引っ越して来た。トラックの引越し荷物にまきれ、ポツンと立つコントラバス。矢野さん自身、遠く感じていた楽器に、隣人の目が止まった。それが鎌響のメンバー。「仲間に入りませんかの一言。仕事に「若干の余裕がでていた」矢野さんが、音楽にカムバックするきっかけ

高成長を支えて：いま
それが今は、約百人のメンバーのうち、三、四十代だけで半数近くを占める。「石油ショック以降、グンと増えたんです。高度成長期をくぐり抜け、一応の生活基盤を築き上げた層が、文化的にも充実した生活を求めるようになったのでしょ」と山本さんは中堅サラリーマンの音楽へのUターン現象を説明する。

三度目のアンコール曲「軽騎兵序曲」で演奏会は終わった。「うちの主人なんか、それでテレビとゴルフだけ。すてきですわね」。コンサートを聴いた主婦のつぶやき。「仕事だけが生活じゃない」という気迫のこもった演奏が、夏の夜、一種のカルチャーショックとなって郊外の団地を駆け抜けた。

50 周年によせて シンガポールでのオケ生活

田ヶ原 恭子 Vla

1 歳より鎌倉在住ですが、弦楽器は高校の部活動だけで、オーケストラに入団することは、全く考えてもいませんでした。

2007 年夏、シンガポールに駐在し、同僚に休日の過ごし方を尋ねたところ、アマチュアオーケストラや日本人の音楽仲間で時々室内楽などをやっているとのこと。一時帰国した際、久しぶりに楽器ケースを開けてみると弓の毛が切れてバラバラ。そのまま蓋をしてシンガポールに持ち帰り、楽器の調整をしてもらいました。

現地での生活や仕事に慣れて 1 年以上経ってから室内楽でポピュラーの全体合奏にどうにか参加するところから再開。そのうち日本人の音楽仲間の誘いで、図に乗って、寛大なシンガポールのアマチュアオーケストラに入団しました。練習会場は地域のコミュニティーセンターで立派なリハ室があり、練習代、チケットノルマなど全くない非常に恵まれた環境ですが、練習は 3 時開始という、3 時に集合という意味で、日本でオーケストラに入っていた人達は面食らっていました。

年間 3-4 回の定期演奏会があるので練習不足は否めませんが、若い才能のあるシンガポリアンの子供ソリスト達の伴奏、大晦日の「のだめ」コンサート、そして中国から指揮者や合唱団を招いて一番有名なエスプラネードコンサートホールで演奏した「黄河」交響曲などは、シンガポールならではの思い出深いコンサートです。

2011 年 10 月に帰任するまで、この趣味のお蔭で、日本では決して出会うことのない多業種かつ様々な年代の日本人、シンガポリアン、多国籍の人々と交流でき、私の生涯の中で非常に貴重な経験ができました。

そんな中で出会ったのが、ホルンの福地亜希さんです。彼女の紹介で、2011 年秋の定演や第九を聴きに伺い、丁度、2012 年 50 周年記念という最高のタイミングで入団させて頂きました。鎌倉市民として、巡り巡って地元のオーケストラで演奏させて頂ける日が来ようとは。非常に感慨深いものです。

鎌響での最初の練習。リハ室にひしめく人数の多さにまず驚きました。ビオラだけで 7 プルート。大人数ですが、役員、係など役割分担がきちんとしていて感心させられました。

合宿に参加してみると、会社の同僚だけでなく、中学・高校の同窓の方々もいらっしやることもわかってきて、少しずつお名前とパートを覚えるよう努力

しています。

ファミコン、99 回定演はオーケストラに詳しくない私にもお馴染みの曲ばかりで、楽しく演奏できました。100 回定演の「復活」は、非常に難曲でしたが、インバル指揮・都響のコンサートにも行き、次第に好きになり、横島先生の素晴らしい指揮にも惹き込まれ、本番が終わった時は感無量でした。この「復活」では、シンガポール時代の音楽仲間、叔母、中学時代の音楽の恩師（合唱団で共演）との再会もありました。毎回、鎌倉芸術館がほぼ満席というのもこれまでにない体験です。本当に幸運な1年で、感謝の気持ちで一杯です。

これから仕事をはじめ諸事情で毎回・毎年続けられるかはわかりませんが、細く長く、60 周年・70 周年の時にも皆様と一緒に演奏できる事を願っています。



左より福地さん Trp、福地さん Hrn、田ヶ原さん Vla、横島先生 Cond
(田ヶ原さん提供)

オケ人生 46 年の雑感

河原 寛 Vn

小2からバイオリンを始めていたものの、初めてオケに目覚めたらしきは中一の時だったか、買ってもらった4本脚のついた「ステレオ」で初めて買ったシカゴ響の「田園」のレコードを毎日聴いた。すぐに「運命」、「未完成」となっていくが、親友からオケのスコアの存在を教えられ、初めて買ったのが「未完成」。早速1stバイオリンパートを写譜し、ステレオの前で「合奏」したりしたが、当然ながらステレオのウィーンフィルとは溶け合わず、今一つ物足りなかった。そこで次に写譜したのが、ベートーベンのバイオリンコンチェルトで、多分伴奏ならと思ったのだろう。そのうち、バイオリンだけでは物足りず、冒頭のティンパニの代わりに「たらい」や、オーボエの代わりに「スペリオパイプ」も自演し、ジノフランチェスカッティとの「共演」を録音機に納めたものだから、結果は推して知るべし、めっちゃくちゃなベートーベンでその後何年もこの名曲に対して何とも不愉快な印象を持つことになってしまった。

そんなことをしながら、中、高はブラバンでトランペットに夢中だったが、あそこは大きなオケがあるよと先輩である叔父の言葉に期待して、東北大オケに入ったのが19歳、ここから私のオケ人生が始まった。入学直後の定期演奏会が濱田徳昭指揮「チャイ5」。1年生で出演出来たのは私だけだったが、すべてが夢を見ているようで、週2回、各2時間半の練習があつという間に過ぎた。そして本番、私は下宿のおばあさんをコンサートに招待し、衝撃的な経験をした。クラシックをかつて一度も聞いたことのないそのおばあさんが興奮気味に私にこう言ったのだ。「終わった時、なんでかわからないけど涙がポロポロとこぼれたんだよ！」それを聞いた時の感動は、私のその後のオケ人生に多分大きな影響を与えたと思う。

社会人となった1971年、静岡に赴任し、静岡のオケ（現 静フィル）で11年を過ごし、その間に今の家内と団内結婚し、我々夫婦を含めたクワルテットや室内楽など、幅広く活動したが、妻の精神的な病いと私の京都への転勤でその活動は終わった。

1982年から12年間、京都市民オケに参加。京大オケ出身者中心のしっかりしたオケで、規模、レベル、選曲など、今の鎌響に近く、小田野先生も度々

指揮されており、ここで学んだことは沢山あった。大きな思い出としては、私が神奈川に戻る直前のオランダ演奏旅行だろうか、コンサートホールで小田野先生の指揮で「幻想」を演奏した。

1994年に神奈川に転勤、鎌響のことを知らず、藤響に2、3回出席したが、あまりコミュニケーションを感じられず、即退団して、皇太子が入っていた東京の俊友会管弦楽団に1年間参加した。藤響より更に団員とのコミュニケーションはなく、なかなか団に馴染めなかったが、演奏技術は高く、選曲も魅力的で、入団した1年間にサンサーンスの「オルガン」とブルックナーの8番を東京芸術劇場で演奏できた。これだけでも在籍した価値はあったが、指揮者が堤俊作オンリーというのと、若者主体の団の雰囲気になじめない点から1年で退団し、1995年の鎌響のサマーコンサートを聴いて鎌響入団を決めた。入って驚いたのはその「アットホーム」な雰囲気から来る居心地の良さだった。入団最初のコンサートはショスタコフ5で、元コンミスの松野さんとブルトを組んだが、この松野さん始め、バイオリンの中村さん、宇多さん、小原さんなど、皆さんやさしくて、面倒見がよく、気軽に声をかけてくれる。新人を大事にする雰囲気、これが今の曾根さん達比較的古い方に受け継がれているが、これが伝統というものだろうか。以来17年、鎌響は着実な歩み続け、一時高齢化を心配する時期もあったが、今のバランスはまずまずと思う。17年間で、印象に残る演奏会と言えば、やはり06年87回定期の三原明人氏指揮ワーグナーの「指輪」抜粋だろうか。当初、ベト4をメインのつもりが、それを前プロとし、終曲を加えてワーグナーをメインとした。この終曲は大変な難曲で、それが為かは不明だが、バイオリン出演者も極端に少なく、2名のエキストラを頼んだのも前代未聞。録音を聴くと混沌とした音程の中に苦労がにじみ出ている。三原さんだから出来たのかもしれないが、非常に貴重な思い出である。もうひとつ、00年75回はやはり三原さん指揮でドビュッシーの「海」とブルックナー7番の組み合わせだったが、やはりどちらもかなりの難曲で、団としても消化不良気味だったと思うし、観客動員数も700人くらいで、この回が歴史的に「底」を形成した。選曲的に少し無理があったと思うが、こうした経験をもとにその後の選曲、企画力は改善されてきていると思う。



河原さんとお孫さんたち 2012年5月三の塔登山(ご自身提供)

この46年間、各オケ、年3回くらいの演奏会をほぼこなしてきたのだが、なんとも幸せなオケ人生だったかと思うし、恐らくその最後のオケになるであろうオケが鎌響であってよかった。鎌響は数あるアマオケの中でもかなり魅力的なオケに育ったと思う。演奏力を伴ったアットホームなところは前述したとおりだが、団費が安いのも良い。これだけの活動を維持して月1000円は驚異的で、関係者の工夫、努力のたまものだ。更に音出し15分前には練習準備がほぼ整うという団員の熱意もすごい。定期の冒頭に鎌倉市歌をやるのもいい。毎年第九が出来るのも幸せなことだ(ドイツ語ならなおいいが)。おそらく様々な良さが相乗的に魅力を高めているのだろう。10年後にはどんなオケになっているか。あの頃は良かったなどという嘆きなど無いよう、ますます発展して行ってほしいと思う。

以前、テレビで見た佐渡裕指揮ベルリンフィルの演奏で、ショスタコフの5番

だったが、脚を大股に広げ、体を左右に大きく動かしながら弾くコンマスの榎本大進とトップサイドが、佐渡裕と3人で顔を見合わせながら何とも楽しそうに演奏しているのが非常に印象に残っている。私は目指すべきオケの姿をそこにみたような気がした。ついアマオケは生真面目に、整然と演奏してしまうものだが、目指すは「思いっきり演奏を楽しみ、そしてその楽しみを聴衆に感じてもらえる」オケではないかと思う。こんなオーケストラというものに46年間浸れた自分は本当に幸せ者だと思う。



ある日のプレコンサート 鎌倉芸術館ロビーで (KSOアーカイブ)

左から河原さん Vn、中村さん Vn、高橋さん Vn、小原さん Vla、中井さん Cell



左から河原さん Vn とコンサートマスターの五味さん 後ろは丸山さん Vla



右に馬場さんと中原さん (Vn) 2002年9月22日の日曜日、岩井海岸合宿古谷先生指揮で40周年記念、巨人の練習などでした。(KSOアーカイブ)